

私と大阪文学学校

富上芳秀

私が大坂文学学校に関わるようになったのは一九八〇年（昭和五十五年）九月だから三十九年ほど昔のことである。最初、通教部の詩のチューターに招かれた。それまで全く関係のなかった文学学校のチューターに私になったのは倉橋健一の推薦によるものであった。当時の理事長、神戸大学教授でフランス文学者の評論家、故小島輝正も、私の詩や評論活動をよく知っていたので、賛成してくれたらしい。当時は、詩のチューターは文学学校の修了生がほとんどであったが、倉橋健一は少し変わったやつを入れて文学学校を活性化させたいと考えたようであった。

一九八〇年は私にとっては画期的な年で、二月には「詩的現代」（黒田喜夫、石毛拓郎、永井孝史、ねじめ正一、坂井信夫、麻生直子、中森美方ら）の創刊に参加した。これは当時、社会派の有望詩人を結集した詩誌として注目されたものであった。十月には第二詩集『聖母の月』を社会派と対極に位置する荒川洋治の紫陽社から上梓した。

大阪文学学校は小野十三郎を校長とする社会派の牙城であった。私は詩とともに安西冬衛を研究するモダニストである。

私は通教部のスクーリングで小野十三郎と同席したとき、詩についての意見が相当、ちがって論争になるのではないかと緊張していた。しかし、文校生の詩に対しての見解は小野さんも私も全く同じであった。作品の長所や短所、表現の可否などの指摘はまったく一致していた。結局、詩の基本的な技術の部分には共通の認識があるが、違いがあるとすれば、最先端の問題で見解の相違が生じるように思った。文学学校の詩の作品では評価が違うようなことはなかったのである。

戦後、関西の詩人の三羽ガラスとして並び称せられたのは、小野十三郎、安西冬衛、竹中郁である。安西さんと竹中さんはモダニスト、小野さんはアナキズム系統の社会派であった。しかし、この三人はとも仲が良かった。私は安西冬衛と竹中郁の研究をしているが、生前、私がいかに会うことができたのは小野十三郎だけである。小野十三郎は謙虚で立派な人であった。合評会が終わるとき「今日は、いい勉強をさせて頂きました。皆さん、ありがとう」と言うのであった。

この当時、スクーリングは詩のクラスは別れていなくて、小野十三郎も右原彪も当時、三十二歳の若造の私も学生も同じ

ように感想を述べあつた。右原彪は安西冬衛の資料を調べるうちに名前を知つた。「キミの新しい感覚からみて、この詩の新しさはどう思ふのかね」などと言って可愛がつてくれた。

私はこの年の三月から大阪文学学校の機関誌「文学学校」(後「樹林」と改題)第229号に詩の時評を担当することになった。この当時「樹林」は月刊誌であつた。先日も「樹林」306号、一九九〇年九月一日刊を読んだと今村欣史という人が「触媒のうた 宮崎修二郎翁の文学史秘話」(神戸新聞総合出版センター刊、二〇一七年五月六日刊)を文学学校気付で送つてくれた。この本は長い間、神戸新聞の新聞記者をしていた宮崎修二郎翁から今村氏が聞き取つたことをまとめたもので、たいへんおもしろい内容である。私は竹中郁を調べた時に宮崎修二郎翁の名前は何度も見た記憶があり、興味のある人であつたが、まさか百歳でご健在とは思わなかつた。久坂葉子、幸田文、柳田國男、竹中郁、中野重治、島尾敏雄、椎名麟三、白川渥、田辺聖子、石上玄一郎、野坂昭如、有本芳水、足立巻一、富田碎花など、凄い交友範囲である。この本はとてもおもしろいので興味のある人は是非読んで欲しい。それはともかく、舌鋒鋭いと今村欣史氏が私をほめてくれた、その号を調べたかつた。また、私が途中で、文学学校を辞めた時期がどれくらいあつたかを知りたかつたので、ある日、文学学校に行つた。一九九一年三月号〜一九九二年一・二月号までの一年間、松本衆司の助けを借りて私は「樹林」の編集長を務めた。バックナンバーを読み返すと松本さんの編集センスのおかげでずいぶん洒落た雑誌になつて

いる。この一年間はいへんしんどい一年であつた。いい雑誌になつたとは思ふのだが、ものすごいエネルギーを奪われてしまつた。それで文学学校のチューターを辞めた。しかし、文学講座というのを毎月やつていた時期があつて、その講座が原因で再び、私が文学学校のチューターに復帰することになった。その時期を知りたいと思つたのである。その記録を調べたいへんだった。小原政幸事務局長に調べてもらつた。調べてもらつた過去の住所録は相当劣化してゐた。一九九二年秋まで昼間部のチューターで、その後、一九九三年にはチューターを辞めているが文章講座は開いている。この文章講座は一九九四年以降は住所録にはない。ただ、講座は何年かやつた記憶が私にはある。チューターでないから住所録に載らなかつたのかもしれない。一九九八年春、再び、私は通教部のチューターとなつたのである。つまり、一九八〇年に通教部のチューターをやり、しばらくして、昼間部のチューターも兼ねて、そのうち担当は昼間部だけになり、一年間「樹林」の編集長をやり、疲れて、五年間の空白(休憩)があり、また復帰して二十年経つたのである。前半の十三年ほどは昼間部のチューターで毎週一回行つたのだから、ずいぶん長い感じがする。後半の現在に至る二十年は通教部で、年四回の作品講評とスクーリングだけだから、それほどしんどくない。全国各地の通教部の学生と知りあうのも昼間部とはまた違う喜びがある。

昔と比べて、文校生が変わつたと思うのは、私も含めて高齢化したからかもしれない。先ず、酒をあまり飲まなくなつ

たことである。昔は、文学集会、開講集会、終了集会などがよくあって、文学学校で飲んだ後、更に梅田まで繰り出した。上六のハイハイタウンで飲んだこともあった。小説クラスの学生やチューターとも飲んでよく話をした。DANというお好み焼き屋があつて、そこで遅くまで飲んでいて、三時頃、帰ろうとしたらもう帰るのかと叱られたこともあった。今、私は通教部だから、クラスの学生が行事に来ることが少ないので私も出席しない。それで、最近はそのような場面に出会うことはないが、酒を飲んで議論をする中で文学的な感性が豊かになることもある。

私は今でも、できるだけ夏季合宿には参加するようにしている。私が最初に行ったのは信貴山だったが、木澤豊、倉橋健一、金時鐘、細見和之など私の前半の時期にはほとんどチューターが参加していて色々勉強になった。私の後半の夏季合宿ではチューターの参加者は昔に比べて少なくなったような気がする。川上明日夫、長谷川龍生、森口透、津木林洋、細見和之などとはよくいっしょになった。中でも、龍生さんの話はおもしろかった。いつだったか、安西冬衛は馬賊の仲間になって、満州を馬で駆け回ったなどと言うので、詩人というのはおもしろい人種だなあと妙に感心した。もちろん、隻脚の詩人、安西冬衛は馬賊などとは全く関係がない。彼が足を切断しなければならなかったのは、父に連れられてきた満州の寒さのために病気になるからである。みんな楽しそうに目を輝かせていた。私はひとりニヤニヤ笑って聞いていた。細見さんがギターを弾きながら歌を歌ってくれたこ

ともあった。私は学生時代に戻ったようないい気分であつた。通教部の学生は遠いところに散らばっているのに、ぜひ参加してほしい。心ゆくまで文学を語り合いたい。いや、普段家族に囲まれて忙しい主婦や仕事に追われているサラリーマンも日常生活を離れて文学的異空間に遊んだらよい。チューターもみんな参加してほしい。色々な所に行った。信貴山では胎内くぐりをしたことがあつた。真の闇の中では腰が引けて足が前に出ない。高野山では百物語をしようとして失敗した。おもしろい話を百も続けられなくて自分の想像力の貧しさを痛感した。また、百も飽きずに語ることは聞く者も語る者もしんどいことがわかつた。飽きたから、みんなで深夜の奥の院に行った。戦国武将の巨大な墓の立ち並ぶ杉木立の道を歩くことなどとても一人ではできない。奈良YHでも合宿はあつたが、あくる日の奈良町散歩で昔の玩具で遊んだり、「春鹿」の酒蔵では五百円で飲める利き酒セットを呑む楽しみがある。近江八幡のYHも古い田舎家でもよかつた。私の好きな「鬼平犯科帳」のロケ地を歩いて帰って来た。あの時も龍生さんの話はおもしろかつた。今でも合宿は色々なチューターと直接、話の出来る贅沢な時間が過ごせるのである。さて、今度、夜 詩の連続講座（月曜）を担当することになった。詩のクラスの人も小説クラスの人も詩を書いてみてはいかがですか。昔のように終わったらみんなで飲みたい。